

新聞コラム紹介

プラントの景色を好む人達*

開発調査グループ研究主幹 鈴木健雄

「工場萌え」と題する、最近出版された写真集がある。副題に、工場好きによる工場好きのための、「工業地帯の歩き方」とあり、化学工場（プラント）やコンビナートにぐっとくる全ての人への紹介と共に、これらの種々の写真とおすすめの鑑賞スポットが記載されている。

こうした「重厚長大」の象徴である装置・設備産業の製造現場は、いわゆる「ハイテク」とはかけ離れた存在で、3K（「きつい」「汚い」「危険」）として、主として若いとされる人達にとっては、職場としては敬遠される対象であると思っていたので、「萌え」（ここでは、対象に対する好意的かつ積極的な興味や関心、支持などの意味で用いる。）の対象となることが意外であった。（因みに、筆者の周囲では「休暇取れない」「給料安い」「来ない嫁さん」等を加えて、7Kとも言われていた。）

遙か40年ほど前の小学校の中学年の頃に、社会科の参考書として見た児童向け年鑑の口絵にあった石油化学コンビナートのカラー写真を見て心を躍らせたことが深層に刷り込まれて化学工学科を志し、その後はエンジニアもどき？となったわが身を振り返りつつ、朋友と出会ったような、今様に言えば、“何気に”明るい気分になった。

発展途上国におけるこの分野の技術者は、本人は国家経済の根幹を担う使命と責任を自覚し、周囲からはある種尊敬の念を抱かれ、自他共に高い意識を持っているように思われる。ひるがえってわが国では、何時の頃からか「重厚長大」は格好良くないとされる風潮の中、実は好意的に捉える目がこうした形で存在することは喜ばしいことと思う。

見ることとそこで働くことは同一ではないが、来年度の企業の新卒採用計画が発表され、また、夏期に多くが実施される一般向けの工場施設の開放や、児童・生徒向けである設備見学の機会の設定など、行事の計画を立案すると思われる新年度の始まったこの時期に、エネルギー関連産業も深く係わるこれらの設備産業に「萌える」若い人々を歓迎し、大切にすることが、当該産業をはぐくみ、関連する人材を確保してゆく手立てであることというのを再確認したい。

* 本文は2007年5月23日に、ガスエネルギー新聞に掲載されたものを転載許可を得て掲載いたしました。

工学教育のあり方や技術者の確保のインセンティブ等に関する議論があるが、理屈ではなく、感性として親しみを持ち、身近に思うことが重要であろう。まずは自分の子供と、甥や姪からか。

(なお、老婆心ながら、企業の秘密保持の観点から、設備の写真等の情報にはある程度の「距離」を保つことも必要なので、念のため。)

お問合せ : report@tky.ieej.or.jp